

poco a poco

パラグアイ便り 2024/03/01 Número13

2022年度 青年海外協力隊

氏名：吉田 花純

職種：小学校教育

【新学期が始まりました】

日本とは違い、パラグアイの夏休みは2ヶ月間あります。夏休み明け、久しぶりに会った同僚の先生方と「久しぶりだね！元気だった？会いたかったよ！」などと会話をしながら、ハグをしました。児童が登校するまでの間に教員は教室の掃除や飾り付けなどをします。時々テレレの回し飲み（パラグアイを代表する文化。冷たいマテ茶を専用のコップとストローを使って飲みます。茶葉が入った1つのコップに何度も水を注ぎ直し、順番に回して飲みます。）をして休憩をしながら、作業を進めます。テレレの回し飲みの輪に、当たり前と呼んでももらえるようになってきていることを嬉しく感じました。

新学期、期待と不安を胸に抱えながらも、キラキラと輝く笑顔で登校してくる子どもたちの様子は、日本もパラグアイも変わらないのだなあと微笑ましく感じました。嬉しそうに『かすみー！』と駆け寄ってきてくれる可愛い子どもたちの笑顔で、準備期間に感じていた疲れを一気に吹き飛ばしてもらえました。



【ひとこと】

夏休みを利用して、パラグアイ国内や近隣の国を旅しました。それらの旅を通し客観的にここでの生活を見つめ直すことで、改めてパラグアイの素敵なおとこに気付くことができました。帰宅後に食べた久しぶりのパラグアイの家庭料理、会えなくて寂しかったと少し拗ねた素振りを見せながらもニコニコした表情で駆け寄ってハグをしてくれる愛おしいパラグアイでの家族たち、『もう日本に帰ってしまったのかと思って心配していたよ。』と言ってくれる近所の人たち。自分がいなくて寂しいと思ってくれるような、そんな温かい人たちに囲まれながら生活できていることが、本当に幸せだと改めて感じました。連日40℃超えの暑さが続く夏の今、我が家に出現する虫の数は増加していく一方です。蒸し暑さや、身体によじ登ってくる虫で目覚める日も多くあります。しかし“それくらいは我慢して当然だ”と割り切ることができるのは、素敵な人間関係に恵まれていて自分は幸運だと感じられているからだと思えます。

また隣国をひとり旅する中で一番印象に残ったことは“スペイン語が話せることがもたらす数え切れないほどのメリット”でした。旅の下調べなどしなくても、分からないことはその場で聞いて解決すること、近道やお得な情報などを簡単に手に入れることもできます。どんなガイドブックよりも、現地の方々が教えてくれる情報が一番です。また、他国から旅行に来られているスペイン語を話される方々と仲良くなることもできます。これまでどちらかと言うと“活動のためにスペイン語を勉強しなくては！”と、語学学習が苦手な自分を奮い立たせてきました。でも今は、昨年11月に受験したDELEというスペイン語の検定に合格できたことや、いつもオンラインでスペイン語を教えてもらっている語学の先生と直接会えたことなどもモチベーションアップに繋がりがり“純粋に自分のためにもっと話せるようになりたい”と、とても前向きな気持ちになっています。きっとこれからいろいろな場面に遭遇し、挫折しそうになることもあるだろうとは思いますが、今心の中に芽生えている気持ちを大切にしたいと思います。



国内最大規模と言われているカーニバルを観に行きました。



パラグアイ唯一の世界遺産『トリニダー遺跡』



ブラジルに住むボリビア人のスペイン語の先生に会いに行きました。



バスで往復14時間かけて大好物の美味しいラーメンが食べられました。